# 新たな里山を意識し，学生・教職員・地域住民・行政等と協議しながら傾斜地を公園化

**大阪大学　豊中キャンパス東口環境整備**

市道歩道より東口を見る

周辺配置図

**◆◇◆整備の目的・方向性◆◇◆**

〇学生・教職員の利便性や快適性を向上させる
〇地域住民にとって魅力あるキャンパス環境を形成する

## ■計画設計のポイント

### 新たな里山の景

正門・阪大坂に次ぐ新たなキャンパスの顔として，授業の中で学生や地域住民と意見交換を行いながら，道路との高低差約６ｍのスロープ化，及び豊中市側斜面の公園的整備の計画を行った。

高木を適度にせん定しながらサクラの大木を極力切らずに工事を行うこと，切土盛土や擁壁などの造成工事を極力減らすこと，日陰に強くメンテナンスに手がかからない地被宿根草類を斜面に植えて，表土の流出を防ぎながら高木と地被類がバランス良い景観を形成するように，「新たな里山の景」を意識して設計した。

車椅子用スロープ

## ■整備戦略

### キャンパスデザインプロジェクト

基礎セミナー「キャンパスデザインプロジェクト※」で学生と地域住民の意見交換を行い計画に反映させた。計画地周辺の通行量を調査した上で宮山町自治会や柴原まちづくり協議会と協同で，豊中警察に横断歩道付け替え要望も提出し，実現している。

また，豊中市の道路整備計画・敷地境界斜面の整備計画と協同検討を行い，隣接部分を豊中市に継続整備してもらうなど，学生・教職員・地域住民・行政・警察と協議しながら，かつ敷地境界を越えた考え方をもって設計を進めた。

市道側より大学側を見る

大学側より市道側を見る

平成21年3月にスロープとその周辺部分（阪大側工事）が完成し，その後豊中市によって平成22年度に，隣接する斜面部分の公園的整備と横断歩道の付け替え（豊中市工事）が行われた。

グランド沿いの歩道

※キャンパスデザインプロジェクトは，フィールドワークを通して生活環境や知的創造環境としての個性や問題を読み取りながら，魅力的な環境を継承したり，創り出したりするためのデザイン活動を行う，キャンパスデザイン室の教員による授業である。

### 緑化大賞

大学関係者・地域住民が安全に散策できるスペースと，緑の景観を形成した点が評価され，財団法人都市緑化基金緑のデザイン賞「緑化大賞」を受賞して助成金(約350万円）を受けた。

## ■利用の促進

### 通り初め式

本計画の完成について，柴原まちづくり協議会には大変よろこんでいただき，柴原町の方々の主催で，豊中市長・大阪大学理事臨席のもと，平成21年6月に通り初め式が行われた。

## ■施設整備の効果

### 満足度

キャンパスイメージアンケートにおける，屋外空間改修の効果についての満足度（豊中キャンパス東口）

・「通行しやすさ」に対する満足度：５４％（回答数１２５）
・「美しさ」に対する満足度：６２％（回答数１２５）

## ■補足

整備年度：平成20年度

第19回 緑のデザイン賞（財団法人都市緑化基金）緑化大賞受賞

# キャンパスマスタープランに基づき
# 地域と環境に調和した景観を創造

帯広畜産大学　環境整備等

開放的に整備された正門周辺

**◆◇◆整備の目的・方向性◆◇◆**

〇地域に開かれた大学を目指す
〇自然を生かした統一感のあるキャンパスの創造

## ■計画設計のポイント

### キャンパスコンセプトの明確化と建物の外観・色彩のルールづくり

「地域に開かれた親しみの持てるキャンパス形成」をコンセプトとし，各建物の外観や色彩に一定のルールを定め，キャンパス景観に統一感を与えている。

かしわプラザ（大学会館）

正門（整備前）

正門（整備後）

### 正門の整備・キャンパス中央部を緑化

閉鎖的であった正門を，キャンパスコンセプトに従い，北海道十勝の自然を生かした開放的な門構えとした。

また，駐車場の移転整備等によりキャンパス中央部を緑化するとともに，開放的な正門から学内へ続くアプローチ道路を大学キャンパスへの導入部として印象的になるよう計画した。

## ■整備戦略

### トップマネジメントによる整備

トップマネジメントの一環として，理事・学長補佐をメンバーとする「施設環境マネジメント会議」において，屋外環境点検・評価を行い，屋外環境の改善が必要であるとした。これにより，学内予算による計画的な屋外環境整備を実施した。

環境整備は，キャンパスマスタープランに基づき，地域と環境に調和した機能的でゆとりのあるキャンパスの創造を目指し整備を進めている。

## ■利用の促進

### 学生による花壇の整備等

構内環境維持のため，不要な樹木の伐採整理，定期的な草刈り，駐車違反車両の取締りなどの環境保全活動に加え，学生による花壇の整備や，構内一斉清掃など全学的な取り組みを行っており，学生がキャンパスに愛着を持つようにしている。

## ■施設整備の効果

### 地域に親しまれるキャンパス

学生・教職員・来学者から施設及び屋外環境について，高い評価を受けており，平成23年に都市景観の創出に寄与した建造物，町並みなどを表彰する「帯広市まちづくりデザイン賞「まち創り部門」」において，「帯広・十勝らしい雄大な自然と調和した空間が形成されており，素晴らしい総合力」と評価され表彰を受けた。さらに，平成24年度より，大学キャンパスが市内観光バスのルートに含まれるなど，観光資源としても評価を受けている。

## ■補足

整備年度：平成16年度～
平成23年に帯広市まちづくりデザイン賞「まち創り部門」を受賞

# 歴史的な建物と桜並木を生かし大学の顔を整備

東京工業大学　本館前プロムナード

左端，左：整備後
上，右端：整備前

**◆◇◆整備の目的･方向性◆◇◆**

〇大学の歴史を継承し，象徴的空間を整備する
〇地域に開かれたキャンパスを整備する

## ■計画設計のポイント

### 歩行者優先の安全なキャンパス

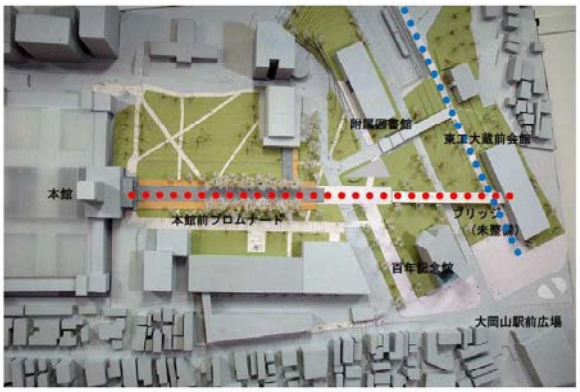
本館前の桜並木と隣接する芝生スロープは東京工業大学を代表する象徴的な外部空間であり，多くの学生や教職員が通行する空間でもあったが，歩車分離がなされておらず，歩行者優先の安全なキャンパスを整備する必要があった。また，シンボルである桜も樹齢６０年近くを経過し，抜本的な処置を講じる必要があったことから，桜の延命を図るとともに桜並木周辺に芝生を植え，歩行者専用のウッドデッキの整備を行った。

### 登録有形文化財のある空間

プロムナード周辺には，2013年12月に登録有形文化財（建造物）に登録された建物（本館，大岡山西１号館，７０周年記念講堂）もあり，東京工業大学の歴史や文化を感じることができるゆとりあるキャンパス空間となっている。

### 地域をつなぐキャンパスへ

本館前プロムナードの整備により，「キャンパス将来計画」に掲げている本館～東工大蔵前会館を結ぶ緑の軸線が完成し，大岡山駅前広場と一体的な環境が整備され，地域をつなぐゆとりあるキャンパス空間が育成された。




キャンパス将来計画のイメージ図

●●●● 本館～ブリッジへ続く軸線
●●●● 環状７号線～緑が丘へ続く軸線

## ■整備戦略

### 計画的整備

キャンパス再整備計画全体を俯瞰（ふかん）する目的で2004年に学長を中心とした企画室施設整備専門班を設置。

2005年に主要３キャンパスの将来計画策定グループを設置し，2006年に大岡山キャンパスとすずかけ台キャンパスにおける「キャンパス将来計画」を策定した。

キャンパス将来計画の中で，本学のシンボルである本館前の桜並木について，

・緑の軸線として芝生スロープとともに末永く保存する
・ゾーニング計画上「地域開放エリア」として位置付ける
・「第２次大学改革」の重点としての景観整備対象とする

ことを明記している。

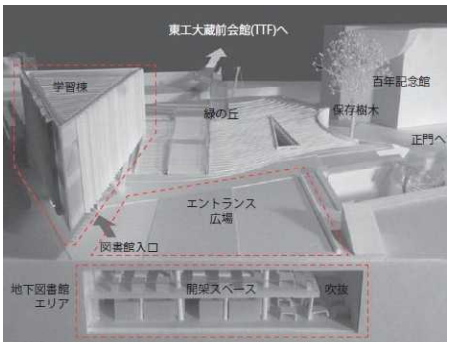
### 環境整備費の確保

環境整備費として年間１億円を学内予算で確保し，計画的な整備を進めている。

## ■利用の促進

### 新図書館の地下化

新図書館の整備に当たって，新図書館が，本館からプロムナードに沿う軸線と，正門から線路に平行な軸線という，キャンパス将来計画における２本の重要な軸線の交差する場所に建設されることになったことから，新図書館の大部分を地下に計画し，軸線空間を確保した。




模型写真：本館側より新図書館の断面を見る
（出典：「東京工業大学附属図書館」パンフレット）

## ■施設整備の効果

### 潤いのあるキャンパス

大岡山キャンパスでは，毎年キャンパスを地域に開放して桜花鑑賞会を実施しているほか，年間を通じて学生・教職員や来訪者の憩いの場となっている。学部・大学院学位記授与式などの際には，ウッドデッキ上で見通しの良くなった本館や桜の木をバックに写真撮影を行っている様子も多く見られる。

## ■補足

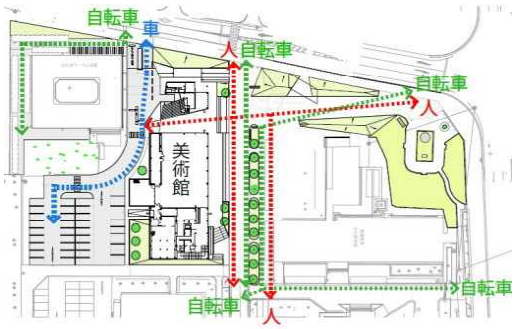
整備年度：平成17年度

# 美術館と正門を一体で整備し
# キャンパス全体を活性化する

佐賀大学　佐賀大学美術館と正門整備

美術館外観

正門（整備後）




計画図

**◆◇◆整備の目的・方向性◆◇◆**

○地域貢献の一環として，芸術・文化の振興を図る
○学内すべての学部・研究科の成果と情報を発信する
○学部・研究科の交流，地域との交流を生む

## ■計画設計のポイント

### 大学の顔を作る

佐賀大学の新たな顔として，本庄キャンパスの正門エリアの整備を計画し，同時に本エリアに美術館の建設を行い，一体的に整備することにより，大学のシンボルとする計画とした。

### 地域とキャンパスの融合

正門からの車の進入を原則禁止し，明確に歩車分離を行い安全性を確保した。また，メインストリートの舗装改修や築山の整備により景観の向上を図るとともに，人の溜（た）まりの場となるバス停やベンチを整備し，さらに，従来の正門に見られる塀，門柱，門扉，フェンス等境界となる工作物を設置しないことにより，キャンパスと地域の融合を図った。なお，佐賀大学らしさの演出として，巨石銘板や時計塔を整備している。

### 人々の活動が主役となるオープンミュージアム

佐賀大学美術館は，大学正門に位置し，「地域交流の場」，「大学広報の場」としてキャンパス全体を活性化させることを念頭におき，５ｍの天井高さ確保・ガラスの多用により明るく開放的な展示空間を確保すること等によって「開かれた美術館」「大学と地域を結ぶ美術館」のイメージを形成し，人々の活動が主役となるオープンミュージアムになるよう配慮している。

## ■整備戦略

### 大学統合10周年記念

佐賀大学美術館は，平成25年10月１日で「旧佐賀大学」と「佐賀医科大学」が統合して10周年を迎えるのを記念し，教育・研究に有意義に活用でき，また，地域・社会貢献の一環となるよう設置された美術館である。当館は，美術・工芸に関する作品を展示・収集・保管し，広く地域の方々の観覧に供するとともに，教育及び研究に資することにより，芸術及び文化の振興を図ることを目的としている。

### 美術館・正門整備委員会等の設置

平成21年度から平成22年度にかけて，学内外の有識者により構成した「佐賀大学の正門整備に関する有識者懇談会」において，新たな正門整備のビジョンについて学長に答申した。

平成22年度に策定した佐賀大学キャンパスマスタープラン2010は，新たな正門整備を踏まえた構成とした。当該エリアは，地域交流ゾーンに位置付けられている。また，佐賀大学キャンパスマスタープラン2010において，キャンパス整備の基本方針の一つに「コミュニティの形成されたキャンパス」を掲げていて，「地域に開かれたキャンパス環境とし，地域との有機的連結を図ること」及び「ゆとりと潤いのある快適な屋外環境を形成すること」を目指しており，本事業はこの基本方針に沿った事業として位置づけられている。

平成23年度から平成25年度にかけて，美術館・正門整備委員会の下に，学内外の有識者により構成した美術館・正門建設WGを設置して，整備方針の検討を行った。

## ■利用の促進

### 大学美術館の特色を生かす

展示のみではなく，大学美術館としての特色を生かし，大学の授業，公開講座，大学と附属学校園との共同授業，講演会，コンサートなどのエンターテイメントを地域の人々とともに作り上げ，楽しむ場になることを目指している。また，館内にショップやカフェを併設している。

## ■施設整備の効果

### 大学のイメージを変える整備

施設利用者の感想としては，「佐賀大学のイメージが大きく変わった」「整備前の正門は，大学の顔としては寂しく，記念行事の際にも写真を撮る場所がなかったが，大学の顔にふさわしい空間になった」との意見が多く寄せられている。

### 予想以上の入館者数

月間五千人，年間六万人の入館者目標を立てていたが，10月2日のオープン以来，２か月（12月4日現在）で15,207人と予想以上の入館者数となっている。

## ■補足

整備年度：平成23年度～平成25年度

# 木材の地産地消で教育研究環境を整備し大学を地域にアピールする

和歌山大学　観光学部校舎

外観

中教室

**◆◇◆整備の目的･方向性◆◇◆**

〇国立大学初の観光学部の教育研究環境を整備する
〇大学を地域へアピールする効果を発揮できるよう木のある景観を整備する

## ■計画設計のポイント

### 大学における教育･研究･社会貢献の拠点

和歌山大学観光学部は，2007年4月に経済学部観光学科として発足し，翌年4月に国立大学法人初の観光学部として衣替えした。この新校舎の整備により，ソフト・ハードの両面で学部としての体制が整うことになる。新校舎は，観光学部と和歌山大学における教育・研究・社会貢献の更なる発展のための新たな拠点となることが期待されている。

メインストリートから見る

### 木材の地産地消

建物は，おもてなしや癒やしがテーマとなる観光学部のコンセプトにふさわしく，和歌山県で生産される「紀州材」をふんだんに取り入れた個性的な木造校舎とし，外装は焼き杉板をイメージした黒色着色の杉板目板張りとした。

### 豊かな空間構成

木造校舎とすることで鉄筋コンクリート造の建物にはない癒やされる空間を持つ校舎とした。講義室とホールは傾斜するキャンパスのシンボルゾーンに開かれており，下からは中教室の１階教壇レベルに，上からは２階ホールレベルに繋（つな）がり，内部では吹き抜けと中教室を介して一つの空間として一体化している。この内部空間と外部を結ぶ中間領域として，「紀州材」による列柱に守られた水平動線を挿入し，建築とランドスケープを緩く結合することとした。このことより人々がシンボルゾーンを移動する風景や講義を受けている有様，そして学生たちが歓談する姿が相互に結びつき，生き生きとしたキャンパスシーンが生まれることを目指している。

ホール

## ■整備戦略

### 目的積立金と県補助金の活用

本施設は，目的積立金と和歌山県の補助事業を活用し整備した。補助事業は国の平成21年度一般会計補正予算による林野庁の「森林整備加速化・林業再生事業費補助金」により設置した「和歌山県森林整備加速化・林業再生基金」を活用した事業である。

## ■利用の促進

### 多目的スペースの活用

建物内の多目的スペースは，観光学部だけでなく，和歌山大学における様々なイベントを行えるスペースとし利用率を高めている。また通常は学生が自由に利用できる憩いの場所としても活用しているが，テーブル・イスなどを自由に移動して規模に応じた利用ができるようにすること等，利用の促進を図っている。さらに，和歌山の伝統工芸品である「組子額」を展示しており，校舎の風格を高める工夫もしている。

## ■施設整備の効果

### 観光学部の志願者数等の大幅増加

観光学部の学生募集状況は，発足時より定員110人に対して約５倍の志願者数となっており，オープンキャンパスの参加者は建物整備前後で約２倍の増加となっている。

### 木の香り

本建物は，観光学部というコンセプトにふさわしく，紀州材を取り入れており，オープンキャンパス等における利用者の感想も，「木の香りがして感じがよい。」など好意的なものが寄せられている。

## ■補足

整備年度：平成21年度～平成23年度

# 学術研究の成果の公開・発信を行い
# 地域との新しいコミュニケーションの拠点を形成

愛媛大学　愛媛大学ミュージアム

外部出入口

常設展示

企画展示

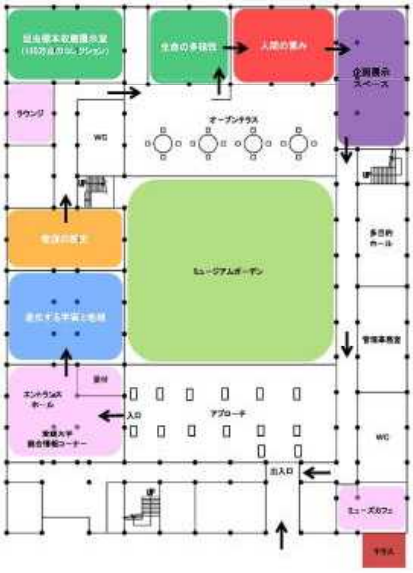
**◆◇◆整備の目的・方向性◆◇◆**

〇地域から信頼され，その期待に応えられる「地域にあって輝く大学」を目指す
〇大学と地域との新しいコミュニケーションの拠点を創る
〇大学が蓄積してきた様々な資料や研究成果を一般の方々，特に若い世代に伝える

## ■計画設計のポイント

### 全学スペースの再配置

総合教育研究棟（旧共通教育管理棟）耐震改修工事に併せて，全学スペースの再配置を行い，１階フロアの約1,320㎡を全学共用ゾーンとして創出した。愛媛大学では，地域から信頼され，その期待に応えられる「地域にあって輝く大学」を目指しており，この中で地域と大学の広くいきいきとした双方向性の関係が求められていることから，ミュージアムというメディアを用いた愛媛大学の学術研究成果の公開・発信を行うことで，地域との新しいコミュニケーションの拠点を形成するため，全学共用ゾーンを愛媛大学ミュージアムとする整備を実施した。



配置図

### 楽しくおもしろく学べる大学博物館の創出

愛媛大学の学術研究活動に本格的な興味・関心をもってもらい，楽しくおもしろく学べる大学博物館を創出するために動線計画，ゾーニング計画，視線計画，照明計画，空調計画を行った。

展示ゾーンは，進化する宇宙と地球，愛媛大学と愛媛の歴史，生命の多様性，人間の営み，昆虫標本収蔵展示室の５つの常設展示ゾーンと教育普及活動や地域貢献を目指した特別展・企画展などを提供する企画展示ゾーンから構成される。

ミュージアムガーデン

### 中庭を取り込む

あまり利用されていなかった中庭をミュージアムの中に取り込み，緑化（芝生広場）の整備を行い，心安らぐ景観の形成を図っている。

## ■整備戦略

### 愛媛大学ユニバーシティー・ミュージアム設置準備委員会

平成19年10月に役員会の下に愛媛大学ユニバーシティー・ミュージアム設置準備委員会を立ち上げ，ミュージアムの基本的な機能，資料の収集・保管の方針，展示の方針，調査研究の方針，組織構成などの検討を行い，基本計画を策定した。

### 愛媛大学キャンパスマスタープラン

愛媛大学キャンパスマスタープランの施設整備に関する基本方針に掲げている「地域社会との連携を重視した教育研究・医療環境づくり」に基づいた整備計画を行った。

## ■利用の促進

### 常設展示と企画展示

地域の方々が気軽に足を向け，展示を楽しみながらゆったりと滞在できるように常設展示を行うとともに，来館者と大学スタッフとの知的交流の場となるように，企画展示スペースを設け，夏の「昆虫展」や秋の「あいだい博」などの人気の企画展を随時開催している。

入館料は無料とし，学内，学外の区別なく見学することができる。隣接してミュージアムカフェを設置しており，コーヒーや手作りのホットドッグやカレーライスなどの軽食ができる。

## ■施設整備の効果

### 来館者数，1万人突破

ミュージアム開館以来，６か月で，来館者が１万人を突破（平成２２年５月）しており，メディアを用いた本学の学術研究成果の公開・発信の場を広げている。

## ■補足

整備年度：平成20年度～平成21年度